
まだ決まってません。。。。

胡蝶 蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ決まってません。。。

【Nコード】

N7934V

【作者名】

胡蝶 蘭

【あらすじ】

序章どうり、ミリーナと憐の恋物語です。

ミリーナの秘密と、盗賊エリーの関係。

孤独と優しさを持つミラ。

を、主に書いていきます。いろいろ視点が変わります。

第一章 く涙と恋く（前書き）

序章をかいたのですが、間違えて短編にしてしまいました（汗）

第一章　く涙と恋く

第一章

私が呼ばれたときには、母は棺の中にいて焼かれるところだった。執事に理由を聞いた。

「チターニヤ様は、病に苦しみさつき血を吐いて…」

何がなんだかわからなくて。

どうして？

私には疑問しか浮かばない。

「そんな…。どうして…？私、こんなこと望んで…」

「チターニヤ様は、最後に

『如月憐という名の新たな召使が来る。ミリーナへ就かせよ。我が亡き者となったら、フィリクに一時期戻れと伝えこちらの指示を任せよ。そして、ミリーナを新たな王女に。我が、双子コタチに伝えよ。神の双子コタチに祝福を』と。遺言を残し…」

『ドサ』

ものすごい音が耳に響いて、身体中に痛みが走る。そしてだんだん意識が遠のいていく。

「ミリーナ様？ミリーナ様！」

召使の声が響く中、私は闇に意識を掴まれたかのように闇が視界を覆った。

その後から、一週間が経つ。母の死を告げられたあのシーンがフラッシュバックする。

私は心が闇の中へと墜ちていた。そんな中でも、召使達は私を気遣ってくれた。

「ミリーナ様…、どうか元気を出して下さい」

「そうです。せめてご飯は食べて下さらないと」

でも、私はもう召使の顔すら見れずただ景色や下を眺めるだけだった。

そんな日が続いたある日の事。微かに記憶に刻んである召使の言った母の遺言の一つである、私の召使『如月憐』が来る日が来た。さすがに私も黙ってはいられず、召使達に支えながらも王宮へ急いだ。

「私に仕える者よ。入るがよい」

本当はこんな事言いたくない。母の様な厳しい心になるからだ。だから、こういう言葉遣いは嫌い。

私はもう、母のことなんて思い出したくないのに。

『ギギー』

ドアの開く音がする。私が目にしたのは、意外な人だった。

椅子にもたれ掛かりぼーっとしてた私は、いきなりでびっくりした。

「貴方は、あの時の？」

その憐という人は、あのときの笑顔で言った。

「はい。ご無沙汰しています、ミリーナ王女。改めまして、私は、日本から来た如月憐と申します。ミリーナ王女、この前より少々元気がないようですが。大丈夫ですか？」

その光景を見た召使は顔を陰しくし

「新人よ。王妃にお近付きあるのは良いが、少々無礼が過ぎる。」

憐と召使の内の最も頑固な男が目には見えないライバル意識をぶつけ合うので、私は制止した。

「やめなさい。れ、いえ如月憐よ、私の後についてきて下さい。ミラ！一緒にについて来て」

「はい♪」

今私が呼んだミラ＝シリウスは、私の唯一無二の親友だ。私はミラ

に支えられながら行こうとすると、召使に呼び止められた。

「あの、ミリーナ様」

「なんですか？」

「一ヶ月後に王妃継承の儀を行いますので…。

あの、引き止めてしまい申し訳ありません」

「気にしないで。では」

多分、このときに召使に見せた私の顔は、とても冷たい顔をしていたかもしれない。

私はそんな酷い自分に目を背けた。

私は、無意識に自分の部屋へと急いだ。

——その後の王宮

「ミリーナ様。あの人が来たらなんだか元気になったわね。でも、やっぱり……あの事を引きずってるのかしら……。」

「ああ。俺もそう思うな。チターニヤ様が亡くなってから、元気がなかった。やっと元気を出してくれたと思ったが、俺達を見た目は……な。はあ……。な、如月憐は、果たしてフィリク王に認められるだろうか？」

「さあ……。フィリク王が、認めずとも、ミリーナ様が認めさせるさ。」

「そうネ」

召使達は静かに王宮を去った。

———城の廊下

私は無意識にあんな事を言っただけを後悔して来たことを後悔する。

だって、なんとなく後ろを少し振り向けば、彼は顔を赤らめ目を逸す。私のことが嫌なのかな。

そう考え込んでいるうちに部屋へ到着した。私は、彼に知らせる為に彼の態度故の歪んだ顔を必死で隠し、作り笑顔で彼についたことを告げる。

「ついたわ。ここが私の部屋。中へどうぞ」

——ミリーナの部屋

と、中にいれたものの…。なにを話したらいいのかわからなかった。そんな中、彼はずっと私から目を逸らし、周りを何度も見渡す。盗聴機や盗撮機でも、おっかない物が仕込まれているとも思っているのかな。

「あの……」

「は、はい！なんでございましょう？ミリーナ王女」

ものすごい緊張している声で言った。

「そんなに…、かしこまらなくて良いのよ？」

「え？」

意味が分からないような顔をされた。そりゃ当たり前か。冷静な分析を頭の中ではするけれど、心はかなりパニックっている。

「ふう。とにかく、落ち着いて？まずは、自己紹介から……、改めまして。私は、ミリーナ・サクンチュアリ。亡きチターニヤ王女の娘。この都の王女の後継者です。よろしくネ」

私は、彼に手を差し延べる。

私は何を言ってるんだ！そんなのこの城に来た時から知ってるでしょ？！

私は自分を叱った。でも、この状況を変えることは出来ない。

かなり動揺してる。どうしよう

私は迷った。どう接すればいいのかな……。

ミラにアイコンタクトをすると、

「新人さん。緊張してるの？じゃあ、次は私ね。私の名前はミラⅡシリウス。皆に内緒で、ミリーナの親友をやってるの。よろしくね。」

ミラも私と同じところに手を差し延べる。

さすがミラね。ミラは、いつもあの微笑みでみんなを和ませる。

彼は、少し驚いた様子だけど笑顔で手を握ってくれた。

「俺…、俺は如月憐。日本から来たんだ。よ、よろしくな。ミラ、ミリーナ王女。」

彼の手は、温かくて優しさに溢れてる気がした。

「…。よ、よろしくね、憐。私のことは、ミリーナって呼んでほしいなっ。堅苦しいのは嫌いなもの」

私は、胸が爆発してしまうくらいドキドキした。

「うん。よろしくね。憐。」

ミラは、相変わらずフレンドリーな性格。

彼は、いつかあんな所に惹かれてしまうの？
そんな不安が心の隅で渦巻いてた。

アレ…、どうしてこんなこと思うんだろう。

まだ、この時の私には分からなかった。

ミラは私を一目みて、にっこりと微笑んだ。

「それじゃ、私はこの辺で」

「ミ、ミラ！どこいくのよ?!」

「お仕事に♪さあさあ、二人っきりでごゆっくり♪」

『ボタン』

「……………」

「……………」

長い沈黙が続く。

どう話かけていいかわかなかった。

そんな時に、話を切り出したのが彼だった。

「あ、あのさ。ミリーナは、友達とか…いないのか？」

『ミリーナ』と呼ぶことは失礼と感じているみたいだ。

この質問は当然の質問だと思った。普通、隣国の姫君や王女の知り合いがこの城に招かれていてもおかしくないし、なおかつ隣国なんかの者はどこにもいないしね。質問するのも、当たり前か…。

私は質問されてチョット淋しくなった。自ら拒んで来た知り合う機会を、今欲しいと思うなんて…。なんて、馬鹿げてるのかしら。虫がよすぎるわ。

そう、自分に叱った。

「ううん。いないの。」

「作らないのか？」

「うん」

憐は、心配そうな顔で見詰めてくるけど、私には言い訳しか出来ない。

「……。傷つくのが怖いし。迷惑とか掛けたくないもの。だから、

ずっと拒んで来たの。」

「…、そうか。なんかゴメンな。嫌なことを聞かれたから不愉快だったろ?」

彼の気遣いは、とても暖かくて、私を癒した。とても嬉しかった。

「気にしないで。ありがと。気遣ってくれて。あのね、実『コンコン』」

言おうとしたが、ノックの音が書き消された。仕方なく、入ってくる召使に目を向けた。

「失礼します。」

「なに?」

「お琴、舞踊の稽古が始まりますので、お知らせに。」

そんなの、行きたくない。でも、迷惑はかけられなくて。仕方なく頷いた。

「……そう。今から行くわ。」

「失礼致しました」

『ボタン』

「憐、私…準備があるから。また今度ネ」

「あ、ああ」

憐はがっかりしたみたいに俯く。二三分程経つと、憐は立ち上がりドアの方へと向かった。

私は、憐にある誘いをした。

「ねえ、憐？」

「なんだ？」

「仕事が終わったら…、薔薇の庭園に来て」

「あ。ああ。分かった。」

「門で待ってるから」

『パタン』

憐はスタスタと音をたてながら行ってしまふ。

段々、憐の足音が遠ざかっていくのが悲しく思えた。

私は着物に着替えて稽古室へと急ぐ。

・ ・ ・

―夜中―ミリーナの部屋

やっと、私の仕事が終了した。多分もう少して憐の仕事も終わり『アレ』が始まる。

そう思って、そつと部屋を抜け出して庭園の門に急いだ。

―庭園の門前

暫く待つと彼は慌てて来た。

「待ったか？」

「ううん。来て、こっちよ」

私は手招きして彼を誘う。

今日は綺麗な満月ね。

いいえ、今日は最後に相応しい、最高に美しいと言える満月ネ。

そう思いながら薔薇の美しい庭園の奥へと入り込んで行った。

でも、庭園の奥深い場所へと近付くと満月は静かに、分厚くて夜の
色に満たされた雲に光を遮られ、その姿を隠してしまった。

私は上を見上げてポツリと呟いた。

「……神様は、酷いわ」

「…？ なにか言ったか？」

「ううん。なんでもないの。ほら、ついたよ」

アレはもう始まっていた。

『……………』

「ああ…。チターニヤ様…」

あそこは泣き崩れる者。

「グス…」

「どうか成仏をして下され：チターニヤ王女」

私と彼は薔薇園の陰からそつとその様子を見守る。

祈り《おきよう》を唱える間、黒い服に少々素朴に見えるネックレスをつけた貴族や大臣達が涙ぐんでいた。

つまり、これは葬式という儀式だ。ホントは、私は来ちゃいけない。

だって、こんな夜中に跡継ぎがいてはイケないでしょう？

万が一来たら私の心が悲しみで崩壊してしまうかもしれないでしょう？

そう思った執事達がわざと私には内緒にしたのだった。

しかし、私にはお見通しだ。だって一人一人を見ると必ず目を逸らすんだから。これは、隠し事をする皆の癖だもん。

彼は私を不思議そうに見つめた。

「なあ…。なんで、チターニヤ王女の葬式なんかに出てんだ？」

「……。私は、こんなくだらない祈りを聞く葬式を見に来たんじゃないの。」

「え？」

「これが終わったら分かんと思う」

ホントを言うこんな儀式なんかどうでも良かった。

『仏に成るように』

そんな私の別世界から伝わった、祈りを唱えるのなんてどうでも良かった。

だって、こんなので天国へ行けるのなら皆、殺戮を繰り返したりして罪を重ねている。信者だってドンドン減っていくし。それどころか、残忍な人が沢山増えちゃうじゃない。

それに、祈りを唱えるよりも、私の都のこの城の死人の葬り方がちやんとあるのに。

そう、私はつまらない祈りを聞きに来たんじゃない。元々の私の城の文化を見に來ただけ。

その文化の名は

『花送り』

庶民には内緒の葬り方。他の者にも内緒の、親密な関係の大臣と召使達だけが知ってる華麗で哀しい儀式。

彼岸花や菊や椿の花や、赤や白の花を咲かせて満月の夜に一時間だけ吹く風が起きるから、その風に花達が乗った瞬間死人の魂は花とともに天に昇る（らしい）の。その瞬間が私は好きだった。だって、こんなに色とりどりの花達に彩れてこの世を去れるなんて、どんな者にも贈られる最高で最後の幸せな一時じゃない。そしたら、その瞬間だけ庶民も罪人も関係なく皆等しくなれる。

私は、そう信じてる。

そして、その瞬間を彼にも見て欲しかったから彼を呼んだの。

『皆様。これにて、御開きとさせていただきます。』

「……グス。チターニャ王女。これにてお別れっ…でございます。うう…」

終了の合図が辺りに響く。皆はまだ涙ぐんでいた。あんなこんなで皆はいなくなる。

残ったのは私と彼。そして、瞬く星々と可憐に咲く花達だけ。

『サァー』

静かに音を立ててヒンヤリとした風が私とすれ違う。

「そろそろ……ね」

「何がだ？」

「見てれば分かるよ。憐」

私は彼の手を掴み、母をイメージした墓像の前へと連れて行く。さっきマデ雲で隠れていた満月を風が雲を退けて満月の光は風とともに私達にへと降り注いだ。

『ザァー…』

「うわぁ…。」

憐は、たった一言を言い残すと、神々しい光の中で舞い踊る赤白の花の姿をただただ黙って見ていた。

「お母様…。さよなら」

私は頬に一筋、暖かくて悲哀が交ざるモノが流れ落ちた。

小さな雫は頬を伝うと、心が壊れてしまうくらいの後悔と悲哀に満たされて、頬には何度も雫が滴る。私は喘ぎ声が零れてしまいうさだから必死に歯を食いしばった。

もう我慢の限界な時に、彼は哀しそうな笑顔で私を自分の胸に引き寄せた。まるで、私を慰めてくれてるように。

「……………」

「もう我慢しないでいいんだ。辛かったよな？」

「うん。うん…。うっうう……………」

私は憐の胸の中で泣いた。それを星々は、優しく静かに私達を見守った。彼は私の頭をそっと撫でる。

でも、こんなに優しくしてくれる彼のことを心の隅で疑っていた。だから、全て流し切ろうとした涙も、疑いという心の隅が、涙を塞ぎ止めた。

「もう、平気か？」

「うん。ありがと。もう、大丈夫だから」

私は、すっーと彼から離れる。

あと、もう少しだけ暖かな感触を感じていたかったのに。

そう思ったけど、姫と召使では、不似合いで上下関係だから？それとも、心の隅での疑いのせい？そう思ったから少し距離を置いた。いや、あの人に誤解を招いてしまうから…かな。

私は、満月の注ぐ黄金の光の中で母の墓の前へとしゃがみこむ。

「どうした？」

「私ね、この人に酷いことを死ぬ間際に言っちゃったの」

なんでこんなこと話してるんだろう。自分でも分からない。でも、この人に聞いて欲しくて。

「なんてだ？」

「『否定してやる』って。随分酷いこと言うよね。私ってさ。」

憐は、静かに黙り込んだ。

「……」

「この花送りに参加したのは、これで最後にするため。」

「最後…？って。この花送りってやつのことか？」

「そう。母様ので終わらせようと思うの。」

「こんなに美しいに…」

「もう、イイの…」

そう。これは決定事項。私は、もう母に別れを告げた。でも…！私は、花送りをみる度に母を思い出してしまう…！私は、それが怖い…。

だから、この儀式はもうやりたくない。。。

「ホントに。ホントにそう思うのか？」

「……………。どうして」

「……。また泣いてるじゃないか。ミリーナ」

「え？」

彼は、困った顔をして私と同じ目線までしゃがみこみハンカチを出して言った。

「ほら。気が付かなかったのか？」

「あ…。」

彼のハンカチで拭われた頬。そのハンカチには、確かに私が新しく流れた涙がくつきりと滲んでいた。

気が付かなかった。

これは、心に溜まってた涙が溢れ出した印なのかもしれない。

「ありがとう」

「さっきも言ったけどよ。今は我慢なんか要らないんだ。お前は、必死に涙を堪えてた。多分さ、それはチャーニヤ様の前では泣きなくなかったんだろ？それか、まだ入ったばかりの俺を信頼してないからかもしれないな。：お前の我慢強さはスゴイと思うけど、今夜だけはもういいんだ。そんなプライドも我慢も捨てようぜ。な？もう今日は本気で泣いていいんだから。」

「……………！」

今度は彼は、暖かな笑顔で私に手を差し延べた。もう我慢なんか要らない。そう思って私は今度は本気で泣いた。全ての悲しみを涙に変えて。

今度は嬉しさと喜びを私の心に詰め込みながら。

.. ..

「憐。今夜はありがとう」

「いいんだ。さ、早く行かなきゃな」

「うん。」

そのとき、後ろを振り向いた瞬間。私の心に詰め込まれた喜びと嬉しさは絶望に変わった。

「ミリーナ、こんな夜遅くに一体なにを…」

「に！兄様！」

「兄様だって？」

「ミリーナ。おい、その者！直ちにそこを去れ」

彼に剣を向けて、アイツは命令した。彼も状況が掴めたらしくて渋々その場を去る。

無理矢理私はアイツが乗って来た白馬に乗らされて、部屋へと連れ

f i n 第一章

込まれた。

第二章　く過去と夢く

あの日から、ミリーナと距離を感じていた。

後から聞いた事だが、ミリーナを連れていったあの男は、ミリーナと瓜二つと言われる存在のミリーナの兄『フィリクⅡサクンチュアリ』らしい。彼は、隣りの国の王妃と幸せな君臨生活をおくっていたのだが、チャターニヤ王女が死んだ為、遺言を果たしに来たらしい。ミリーナは、最近よく自分の部屋に籠り兄に説教されながら勉強を続けていた。俺は、ミリーナの執事なのでハーブティーをいれてあげたりするが、

「失礼致します」

「御前か、如月。何の用だ？」

「ミリーナ姫様とフィリク王への差し入れでございます。ハーブティーをいれて参りました。御休憩に御飲み下さい。」

「そうか。頂こう。」

フィリクは、俺の前で一口紅茶を優雅に飲む。

「なかなかのものだ。評価しよう。」

ミリーナが、ハーブティーに手を伸ばし飲もうとした瞬間にフィリクが睨みつけ、ミリーナの手をピシャリと叩いた。

その瞬間、俺はアイツを殴るところだったが必死で堪えた。

「勝手に飲むな。俺の許可無しに」

「ごめんなさい。お兄様…。」

「また監禁してやろうか??あのときのように」

ふざけたように笑うフィリクに対し、ミリーナは紅茶をこぼしつつも、床に跪き必死に叫んだ。

俺は、何も出来ずただ黙っているしかなかった。

「やめて。やめて!ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!なんでもするから!だから…!!」

「じゃ、早く勉強を進めなさい…。」

「はい」

俺は、不愉快でしかたがなかったが理性で抑えた。

「ハーブティーを入れ直してきましようか?」

「あ、ああ」

俺はカップの乗った皿を手に取りドアを開け戸を閉めた後にミラがいた。

「なあ?ミラ?」

「何?」

「フィリク王はあんなに意地悪なのか？」

ミラは首を振り哀しそうに言った。

「フィリク王は、もっと優しくて大人な人だよ。でも、わざとミリーナを苛めて、ミリーナの心を鍛えようとしているのよ。多分…」

「ふうん…」

そのまま立ち去ろうとしたので、一番聞きたい事を聞いた。

「ミラ！」

「何？まだ何かある？」

「ミリーナは、過去に何かあったのか？」

「どうしたのよ。い、いきなり」

ミラが顔色を変えた。知られたくはないのだろうか。

「知ってるなら教えてくれ」

「し、知らない…！」

ミラは慌てて立ち去って行く。

「……そうか」

俺は『ミリーナの過去が知りたい』そう思っていた。

そしたら、ミリーナのことをもっと知られるかもしれない。理解者になってあげられるかもしれない。

俺はただの執事だけど、雇われている身だけど。身分があまりにも違いすぎるけど。

せめて俺だけでも、理解者に、側にられる存在になってやりたくて。俺は、廊下からある窓の外を見て、そっとカーテンを閉めた。

――夜のミリーナの部屋

(ミリーナの視点)

もう部屋は暗くて何もかもが見えぬ漆黒の闇に包まれていた。私は恐くてベッドに潜る。

… … …

「お父様？ お父様！」

気がつけば、あの闇が消えて、美しい光の世界が視界を駆け巡っていた。一番光の眩しい所には父の姿があった。

私は、後ろに視線を感じたので、振り向くと変な男の子と、男の子にそっくりの女の子が私の後ろにいた。

「どこかで見た顔…。…っ！」

思い出そうと必死に考えるがその分の傷みが感じられる。そんな中、そっくりの男の子と女の子が手招きをした。私は、光の眩しい所にいる父を見ると、父は行きなさいとでも言う風にコクリと頷いていた。私が男の子と女の子の所にいくと、私の手に鈍い銀色の光を放つ少し横長い棒を渡された。

「何？これ」

これも見た事がある。だが思い出せない。そんな中、女の子が説明をした。

「それは、玩具よ。凄く面白いの。この真ん中の凸凹している場所を押すと面白い事が起きるわよ。」

「そうなんだ。ありがとう」

私は御礼を言って父に持って来て見せた。

「みてみて。お父様！」

父は驚いた様に、震えていた。

でも気にも留めなかった。幼い私に戻ったようで、仕方ない。

父に見て欲しいの。私の遊んでるところ♪

心はもうとまらなくて、父に笑顔で私は言った。

「あのね。このボタンを押すと面白い事が起きるんだって。見てて〜！」

「やめなさい！」

父の叫ぶ声を聞いたのは一足遅く、父の腹に針が一本刺さっていた。そして、立ったまま父は苦しそうな顔をしてお腹を抱えた。そして次の瞬間。とてつもない不安と恐怖を覚えた。

「お父様?? どうしたの? ねえ! お父様! お父様!! なんで動かないの? ねえ!」

私が慌てているうちにドンドン父の胸元が赤グロく染まってゆく。

「あはは! あーっははは! バカね! それは毒針銃だよ。毒針に刺さると10分以内に死ぬ猛毒が塗ってあるの。まんまと引っ掛かった! ミリーナ姫さーん!! アンタみたいな子は、スゴイ憎らしいんだよねー! まあ、秘宝さえ手に入れば、問題はないんだけど...! さあ! 渡しなさい! 秘宝を! さあ渡しなさい!」

おもちゃと告げられた毒針銃を、父の横に落とし、足は脱力し床にペタンと座りこんでしまった。

「秘宝って何? 何の話よ?」

「惚けるつもり?」

「ホントに.....知ら...ない...」

恐怖でいっぱいになったその心はもう制御しきれない。

この問いかけの答えなら知っている。でも、心が教えるなって叫ぶんだ。

そしてこれ以上近づくなという警報が頭に何度も何度も響く、逃げろって。

「姉ちゃん、王を殺しといてその言い草はないだろう？」

弟らしき人が否定に入る。

一瞬、彼が救世主に見えた。

ああ、これで私は助かる。逃げられる。

「うるさい、まあ良いや、教えてあげるわ。その秘宝とは、あんた達神の末裔に伝わるモノで伝説の龍神を呼び出せ……！」

その瞬間！弟が姉の目の前に飛び込んだ。

「姉ちゃん……！」

一瞬時間が止まった様に見えたがすぐに現実を目にした。

そう、あの時彼の右足に毒針がグサリと刺さっていた。

ゆらりと弟の全身が倒れた。弟の見た先にいたのは、父だった。どうやら自ら持参していたらしき解毒剤を使って解毒して、横にあった毒針銃を使い姉を撃とうとしたが弟にあたっただけらしい。姉は、

「ガゼル？ガゼル！おのれ……おのれえ……！ガゼルを返してよ！返して！」

彼女を庇い死した彼を何度も揺さぶりながら嘆く彼女。
私はお父様の所へ向かう。

「お父様。大丈夫？」

「平気だよ。この事は、誰にも内緒だよ」

慌てた言う父。

多分、王が人を殺したと噂にも何もなっただけ欲しくはなかったんだろう。

私は、父がみんなに嫌われて欲しくなくて。

いや、はやくこの場から立ち去りたくて返事をした。

「はい」

でも顔を見合わせたこの約束が、最後の会話だった。

『グサッ！』

『グチュ…』

私の横で、鋭い刃が父の心臓を貫いて、横に血塗れた銀色の刃が顔を出し、不気味な音を起てながら、ゆっくりと顔を引込めている。

父は目を見開きながら即死し音もなく崩れ落ちた。そして、父の後ろには大きな男が血まみれの刃物を手に持って

「オイ！エリー！馬を待たせてある。ずらかるぞ！」

「え！父さんでも」

エリーと呼ばれる少女は弟を置いて去ろうとしている。

その瞬間。心に憎悪が芽生えた。

よくも。よくも。お父様を殺したな。

散々私達を痛めつけたくせに。

大切な人を奪ったくせに。

ふん。弟が死んだなんて自業自得だ。

それよりも、お父様が死んだことのほうがよっぽど酷いんだ。
それなのに。
それなのに。

横から入って来たあの父親も許さない。

お父様を殺した手。憎らしい、汚らしい！

仕返ししてやりたい。

みんな、みんな・・・。

八つ裂きだ！！！！！！

私は意識を飛ばした。

私の耳元で変な音がする。でも何故か『心地いい』や

.. ..

私気がついた時には、純白な光から、漆黒の闇へと変化を遂げていた。右手にはあの毒針銃、左手にはべつとりと血がついていた。

「あっ。あっあ…」

そして、足元には誰のものかも解らない骸が山のようにあった。

目に映るのは、沢山の赤黒い骸と地面や手足についた真っ赤な血。

私は、もう意識も何も、心の中から全部消え失せた・・・。

..

..

「……」

ゆっくりと瞼を開ける。まだ夜中だった。

起き上がってカーテンをめくる。

私、何の夢をみていたの？

思い出せない・・・でも。

心地良くて、最後は怖かった。

懐かしい気もしたんだ。

私は、一体何の夢を見たんだろう？

怖い夢？ 幸せな夢？ 不幸な夢？ 色々考えては見るけれど、やっぱり
思い出せない。

「また、あの夢か？」

男の人の声が響いた。

その声は、私の兄、フィリクの声だった。

三章　く現実と夢く（前書き）

主人公達の視点がいっぱいありますが、よろしくです。
ちなみに、セリフメインなのでそのところを御了承願いたいです。

三章　く現実と夢く

私は、ふと目が覚めた。

周りを見ると、まだ暗くて日が昇っていなかった。

まだ4、5時ぐらいだろう。

ほのかにあいつの妻、リリイの香りが私の部屋に漂っていて私はまたベッドに潜り込む。リリイは私よりも年上だけど、男にはいい娘面して女には生意気な態度を取る不可思議でずる賢くて裏表ある理解不能な、このラフェーナ王国の隣国のアレフォス王国の我が儘姫。彼女はいつも百合の香りがした。こんな姫を嫁にもらった私の一番の身内で一番嫌いな奴との昨日の会話が私の頭にフラッシュバックする。

それは、まだ深夜……。もう少しで今日という次の日が来る頃だった。

――昨日のミリーナの部屋

私は、悪夢を見て目が覚めた。

内容は覚えていない。だが何故か、優越感と罪悪感を感じていた。そして、ふと隣りを見ると私の嫌いで忌々しい人物。兄のフィリクがいた。

「また、うなされていたのか。どんな夢を？」

王様気取りで言う。

私はこれでも王女なのに。この国を継いだのに。未だに対等に話してくれない。

兄妹だからって、私はこんな人に気を遣わないといけないのか。

「お兄様の言う泡沫の夢です。泡の様に消えてしまうお父様の死の夢を：でも内容は覚えていない。御母様の報いなのかも知れないのよね。夢で過去を見せ苦しませる。」

そういうと、フィリクは驚いたように。いや、哀れむような目で私を見てきた。

いつもその目が嫌いだった。

兄が上だと図に乗り、いつもいつも。幼子の時からそうだった。

「お母様は、私が嫌いだったのかもね」

「それは…」

『違う』といたいたいのだろうか？だが、私にとってはただの言い訳にしか過ぎなかった。

「綺麗ごとを並べて！また：誤魔化す！アンタも御母様も同じ！結局は、私を傷つけてちよっと問い詰めれば気持ちを誤魔化す。私はみんなに八つ当たりされて：、盪回しにされた。最後には、実の兄に八つ当たりされ終わる…。実に傑作よね」

「それは…」

何も言えぬ兄が『憎い』どうする事も出来ぬ兄が『嫌い』だった。私を憐れむような目で、その母そっくりの目で、私を見ないで！！

私は、フィリクから目を逸らしてドスをきかせて言ってやった。

「お兄様に何が分かるの？ ねえ？」

「……………」

何も答えようとはしなかった。

ただひたすらじっとこちらを見続けている、私をいつまでも監視するように。

「結局は、何も答えられないんだ。あはは……。・・・もう帰って。」

「でも……」

「帰って。二度と私の前に現れないで。そして、もしもミラや憐に現れたり近付いたら、私、許さないから」

.. ..

忌々しく思えてくる会話を思い出していると、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい」

「俺だ」

憐は、私のとこまで来ると、複雑そうな顔をして言った。

「フィリク王が帰るそうだ。皆全員で見送るそうなんだが、ミリーナはどうする？」

「私はいい。お兄様とは会いたくないの。ここで見送るから。憐も一緒にいてくれる？」

「分かった。時間になったら、また来る」

憐は私に笑顔で答えると、寝ている私の髪をそつとを撫でて去っていった。

そして、深い睡魔に襲われる。

「もう一眠り、しょう・・・。」

それから、数時間後。私と憐は、この部屋で密やかに兄という嫌いな人物を見送った。

「行っちゃまったな。寂しくないのか？」

「寂しくなんてないわ。だって、私にはミラや憐もいるでしょう？それに、お兄様はいつも私を独りにしてきたんだから……。もう慣れたの、こんな光景は」

そう。私は、もう慣れたの。

幼子の時も、私をおいて消えて行く兄の姿を見るのは。もう、うんざりなの。

だから、追い払ってやった。それだけのこと。もう、相手から離れていく様を見るのは、嫌だから。

だったら、自分から突き放した方がマシだってそう思ったの。

「そうか……」

憐、そんな顔しないで？

私を、哀れむような。そんな目で、私を……。私を……。！フィリクと同じ目で……！

見ないで！！！！！！

私は、ある事を思いついた。

いつも入って来た召使に試していた言葉を。

「憐、一つ。聞いてもいい？」

私、知ってるの。密かに殺人姫ってよばれてること。

憐は知らないかもだけど、密かに囁かれてること。

私は、殺人なんてしたことないししようとも思わない。でもみんなは言うの。殺人のお姫様って。

だから、噂通りの私の、自分でも知らない私を貴方に話したら……。

・・・どうなるの？

「私がもし、人を殺していたら。憐、どうする？」

私はまだ人を殺したとは認めていないけど、貴方に聞きたい。

もしも、本当だったら。貴方は、私に仕えてきた召使達のように離れていってしまうの？

「俺は・・・、別に、”何とも思わない”」

「え？」

今、憐はなんて言ったの？

”何とも思わない”？

そんなのアリエルはずがない。だって、誰だって人を一度でも殺したら、みんな軽蔑するはずなのに。

嘘よ。虚言よ。

でも、憐を”疑う”の？

私はただ黙るしかできなかった。自問自答しても私には何にも解らない。ただ、その場で固まることしか出来なかった。

憐は困ったような、悲しそうな、複雑の笑みを私に見せてそつと私の頭を撫でた。

それが、なんとなく心地良いと思ってしまう。

「そんなの、今更疑ってたって、仕方ないだろ？それに、過去は過去で今は今だ。

気にしなくていいと思うぜ？そりゃ、人殺しは一番やってはいけな
いけど・・・。俺は、ミリーナを信じてるから」

・・・。

やっと、解った気がする。

正直言って、私は憐に惹かれていた。

恋をしていた気がした。

まだ、私にはよくわからなかった感情だったけど、やっと解ったの。

私は、この人の素直さ、正直さに惹かれていたんだ。

私の周りの人間はいつも何かをはぐらかしていた気がする。私によく見せる笑顔もニセの笑みだということも分かっていった。みんな、誰かしら私に対して嘘をついている。それも些細なことじゃない。とても重要なことを隠されている気がする。

私は、特に他人の過去と言うモノには興味がなかった。

でも、自分の過去についてはなんとなく知りたかった。だって、私は何故か父を亡くした日のことを覚えていないのだから。みんなには、病気で亡くなった。と聞かされたけど多分嘘。

だって、みんな私と視線を合わせないのだから。

私には過去があると母が亡くなる前から気づいていた。

私はずっと気にしてた。もしかしたら私は誰かを傷付けたのかもしれない。そう思うと不安でみんなの目が怖くなっていったんだ。

でも、憐は違った。

私は初めて会った瞬間から惹かれていたんだ。

憐ならきつと、全てを受け入れてくれるかもしれない。

他のみんなとは違うの。

憐は、きつと私を・・・。

” ホントウニ？ ”

” ホントウニ、ソウ？ ”

私の心の闇がささやいた。

私は、憐を一目みた。

憐はいつものように、私の好きな笑顔で私をなでていた。

”モシカシタラ、ウソナノカモシレナイヨ?”

”ミンナ、アンナフウニゴマカシテイタジャナイ”

”ダマサレチャダメダヨ”

”ウソダヨ”

闇がささやく。私が心の底で思うその闇は、頭の中でこだまする。

憐は・・・、違うんだ!

違う、違う、違う、違う!!!

ただ否定するしかできない。

本当は、私自身がそう思っていることなのに。否定をするしか・・・、出来ない。

「ミリーナ!?!」

私を呼ぶ声が耳に入った。

その時には、浮遊感に襲われていて、身体に痛みが走った。見えるのは天井。ああ、倒れたんだ。

憐は私を心配そうに見てきた。

私は大丈夫だよ? だから、心配しないで?

「しっかりしろ! ミリーナ!!!!!!」

私は、精一杯の笑顔を見せた。

アレ……アレ……憐の顔が滲んで見えない? なんで……?

そんな考えを持つ私は、今限界だった。暫く眠りたい。

私は、憐に支えれ横に為り、目を瞑った。

——ミリーナの部屋（憐視点）

医者に診せた結果、症状は軽くただの疲労だと言っていた。

俺は、ミリーナを寝かせた後ずっと側にいた。そんな時にミラが来た。

ミラはミリーナを見た瞬間、硬直し冷や汗をかいて俺を見た。

「憐…」

「ミ、ミラ。なんだよ？」

「ミリーナ？どうしたの？」

俺は、ミラがいなかった時の事を一部始終話した。

するとミラは、哀しそうに言った

「前にもこんな事があったの。あなたが今話してくれた、『人を殺していて別の人格があったら』って質問は、ホントの事。四〇五年

ぐらい前に王、ミリーナの父様が死んだのは、知ってるよね？」

「あ…ああ。有名だからな。此処に来たら皆口々にこの事を言ってたけどそれがどうしたんだ？」

「その父親殺しの犯人は、ミリーナが殺したの。」

「・・・」

黙ることしかできない。ミラはそんな俺をじっと見つめ、またミリーナの方に視線を合わせると話を続けた。

「ちなみに、このことは今のミリーナは知らない。実は、ミリーナが心を閉ざしてしまったのはミリーナはチャターニヤ王女へのストレスだけじゃなくて、最も相応しい理由があったの。」

「なんだよ」

「ミリーナに仕える者達が、この事実を知った時次々と挫折していき、ミリーナを拒絶していったのよ…！他に、王の敵討ちだとミリーナを殺そうとしていた奴も……」

ミリーナは、自分からも執事との交流を拒絶した。自分の心の傷を癒す為に、傷を浅くするために。」

それは、身内に対しての不満がかなり彼女を傷つけていることになる。

だから、誰とも交流もせず。あんなに、外を寂しそうに眺めていたんだ。

もう傷つきたくないから。。。

でも、今は彼女の召使は俺。
もしも彼女の傷を深くしていたら、どうなのだろうか？

「なあ。ミラ」

ミラは不思議そうにこちらを見る。

「俺は、ミリーナの傷を癒せていたのか？そして、信じてくれているだろうか？」

ミラはきょとんとして、しばらく黙る。

そしてなんだか悩むように顔を俯かせたけれど、次第に微笑み彼女の頭を撫でながら言った。

「そうね。傷を癒せたかどうか・・・。それは私にも解らないわ。だって、それはこの子の問題。私達はこの子の心に直接干渉することとはできないもの。でもね・・・」

「でも？」

「信じてくれている。それは確かだと思う。」

「ホントか？」

「ええ。ミリーナはいつも貴方という楽しそうなもの。だから、きっと信じてくれている。だからそう心配しなくても平気よ」

そう言って、スッと立ち上がり扉の向こうへと行こうとしたものだから俺はすぐに呼び止めた。

「お、おい…ミラ！御前は残らねえのか！ミリーナの事を思うなら…！」

だが、その目を見た瞬間それ以上言葉が出なくて。ミラは申し訳なさそうに顔を歪ませた。

「ゴメンね…。任せる他今は出来ないの」

最後にミラは、哀しそうに笑った。そして、何かに追われているように恐怖に満ちた目をして、此所をいなくなった。

哀しそうなミラを心配する俺とは裏腹に、心は歓んでいた。

何故ならミリーナが俺を信じてくれたからだ。こんな嬉しい事はない…。俺は、ミリーナと刻を共有していると共に好意を寄せていた。外見ではなく、彼女の事を知るたびに側に居たい。支えたいと想うようになった。だが、その気持ちは伝える事は出来ない。何故なら

『執事は、恋愛というものには関わってはならない。常に無慈悲な者であらなければ為らない。たとえ、姫に王女に貴族に好意を寄せられても、常に無慈悲な性格であれ』

それが心の楔に為っていた。『教えは破っては為らない』『主人と執事存在は別格だから』

そう…もう一人の俺が永遠に止まる事なく言い続ける。

..

.. ..

——隣国——フィリクの部屋

「失礼します…」

扉の音が小さな応接室に響いた。

ミラはそつと扉を閉めると、目の前の、朱の瞳を持つ少年を警戒するように睨み付ける。

「ミラ。珍しく緊張してんな。御主人の命令には絶対逆らわず、盗みや殺人にマデ働き掛けた御前がそんな緊張するとは」

少年はそう言い放つとケラケラと笑う。

ミラは一切応じず、ただ愛想笑いをしながら拳を握りしめた。

「……！弱みを握ったつもり？これ以上は丁寧語は必要ないよね。フィリクお兄さん！」

「ああ。くだらない言葉遣いも飽き飽きしていたからな」

フィリクは、意地の悪い笑みを浮べて足を組直す。

ミラは冷静に、出来る限り平静を装いながら言った。

「んで、何の用で呼出したの？いつも大人しいアンタが直々に呼び出すなんてねえ！」

「ああ。ミリーナを解放してやる為に、如月憐を暗殺しろ。」

その言葉から沈黙が走る。ミラは忸く口を開いた。

「出来ない相談よ。」

「何故だ？では、暗殺すれば、ミリーナを解放して、大金も出すぞ？どうだ？悪い話じゃないだろう」

「大金なんか要らない！大体ね、憐の事をミリーナは……」

フィリクは顔をしかめた。

「ミリーナはなんだ？」

ミラは、失言してしまったことをこの言葉によってスゴく後悔する。何故ならミリーナが憐を『好き』だと知ればきっと自ら殺しに行くであろうことを、分かっていたからだ。

「あ……、ミリーナは憐の事を気に入ってるの！だから引き離すのは可哀相だなんて……」

「相変わらず情が脆いな、ミラ。シリウス。獅子の如く華麗な舞を魅せていた先祖とは大違いだ。」

「……。変わったね。フィリク。なんでそんなに為ったの？」

「御前には関係は無い。まあどうしても断るといふのなら御前をくびにする事も可能だろう」

「構わないよ。職場をそうやって卑怯な手で奪えばいい！アンタみたいな弱虫に従う意義は無いわよ」

「良い度胸だな。王にその様な口を聞くとは……」

フィリクは微笑しながら……と言っても口はピエロのようにニヤリと

笑みを浮かべ、目は全く笑ってはいない。

ミラは、恐れた。さっきのミリーナの部屋での、あのゾツとしたあの沸き上がる恐怖でなく、殺気を感じさせる、出来るなら今すぐ逃げ出したい。そんな恐怖。

『本気だ』そう思ったミラは、話題を逸らそうと話を切り出そうとしたが、先手を取ったのはフィリクだった。

「なら、俺にも考えがある。御前の大切な村を焼き殺そうか？暗殺しなかったら大勢の村人達は焼き消える。勿論、御前の家族もなあ」

「・・・最低」

ミラは平静から顔を歪め、じっと耐える。。

フィリクは、それを面白がるようにその姿を嘲笑い、脅した。

「殺るのか？殺らないのか？」

「……！卑怯者！神の末裔として恥ずかしくないの？」

「べつに。関係ない。さあ、どうする」

「……………」

ミラは無言で涙目でうなずいた。

「それでいい。」

「・・・」

ミラは、屈辱的な感情を受けていた。自らの家族を友人達を守る為

に友という名の宝物を見捨て自ら宝を壊そうとする自分が嫌いで仕方ないのだから。

「ふんっ！明日の夜中の二時にこの城の井戸で殺せ！俺も立ち会うからな。いいな？…………ミラ！」

「……はい」

ミラは、目に涙を浮べ出て行った。

「クスクス……………！ご協力感謝しますよ、王様！これで邪魔はいなくなる。そして王女は私の手で…………殺してやる！あははハハハ！！アーハハハ！」

金と赤の壁紙の応接室に、醜くも美しい笑いが響く。

分厚い雲が月から離れ、満月が静かに現れた。

月明りに照らされた王の首筋には、鈍く光る短剣の先が突き当てられている。

その隣りにいるのは、闇の如き色の髪に紅く燃える瞳の娘がミラの姿をして短剣を突き立てている。

「くっ！…………邪道の者が！放せ！」

「ふんっ！私は、ミリーナを殺すマデは何度でも這い上がろうぞ！
アンタは、地下牢にでもいれば良いよ！アハハハ！！」

..

.. ..

私はまだ闇の中に籠っていた。
隣のあの優しさが信じられなくて。

『お母様・・・お父様・・・』

そう呼び掛ければ、私の幼子のときの父母が現れ、思い出の中で幼^わ子^{たし}と遊ぶ。

ふと、一瞬だけ目が合った。

でもその目は笑っていなくて、哀れな目で見ていた。そして、まだ
純粹だった幼子^{わたし}に視線を戻して、愛しそうに幼子^{わたし}を撫でた。
それが目障りで妬ましくて。あっさりと消した。

『誰も、今の私を笑顔で迎えてはくれないのね』

ずっと、引きこもったってしょうがないのに。

自分でそう思ったって、結局はここが一番落ち着く。

この闇は、今の私にとって安らぎでしかないのに。

私は、闇に身を任せて目を閉じた。

現実と夢を区別したくなくて。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7934v/>

まだ決まってません。。。

2011年10月10日12時05分発行